



参加申し込み
(12月1日まで)

<https://forms.gle/S2XQ8gjQVftVXPRo9>

第6回子ども参加研究会

(スペイン)

ベンポスタ子ども共和国

ドキュメンタリー映画「ベンポスタ子ども共和国」を
観ながら、星野弥生さん(翻訳家)が語る-

(担当 喜多明人)

世界の各地からやってきた子どもたちが、共に生活をし、学び、労働をし、自治をおこなっていた国、ベンポスタ子ども共和国が、スペインの北西、ガリシア地方にありました。とてもユニークな、その国の最大の特徴は、子どもたちが、国を成り立たせていくために、サーカス公演で世界を回り、経済活動をも担ってきたということです。

日本の子どもの社会参加活動の中で、その活動経費を子どもたち自身が担うことはほとんどありません。というよりも、それは支援するおとな側の役割ととらえられがちです。

今では数少なくなったベンポスタを知る世代の星野弥生さんは、ベンポスタ子ども共和国の「駐日大使」でもあります。なぜ、いまだに「ベンポスタ」なのか、その思いを現地での子どもたちの活動と国の理念を描いたドキュメンタリー映画を観ながら語ってもらいます。

日時 2023年12月9日(土) 午後3時半～6時半

会場 世田谷区立宮坂区民センター・大会議室

東京都世田谷区宮坂1-24-6

電話番号 03-3706-3501

(電車をご利用の場合) 世田谷線「宮の坂駅」下車すぐ

小田急線豪徳寺駅から徒歩10分くらい

※第6回子ども参加研究会は、ハイブリッド開催です。

オンライン参加を希望する方には前日まで招待URLをお送りいたします。



ベンポスタ子ども共和国とは？

ヘスス・シルバ・メンデス(Jesús César Silva Méndez)神父が1956年に自分の生まれた町、スペインのオレンセに暮らす20人の少年たちと「建国」した、ベンポスタ子ども共和国は、こどもたちが共に生活をし、学校で学び、工場や畑で働き、自分たちで自治を行う共同体。

はじめの頃は、オレンセ市内や近郊のセラノバなどを学びの場として運営されていたがその後、オレンセから7キロのところにあるブドウ畑を買い取り、「子どもたちのまち」が作られた。この場所は「ベンポスタ」とよばれ、ガリシア語で「よく耕された」という意味、そのまま「共和国」の名前となった。

ベンポスタの中には、こどもたちが生活をする「宿舎」、勉強をする「学校」、食堂、銀行、教会などの他、いろいろな工場や畑もあり、ベンポスタの人びとは、外に出ることなくここで生活することができる。また、18キロ離れた岩山にある「サン・ペドロ・デ・ローカス」修道院は、子どもたちの修行の場として使われていた。

ベンポスタ子ども共和国の最大の特徴である「サーカス学校」は、1962年に設立され、子どもたちは毎日サーカスの練習をし、世界各地を回った。サーカス公演は、ベンポスタの重要な収入源であるだけでなく、公演を通じて、世界に平和を訴える手段でもある。フィナーレを全員でかざる「人間ピラミッド」は、「強い者が下に、弱い者は上に、こどもはてっぺんに！」という、あるべき世界の形を表現するものでもある。

これまでに公演を行ってきた国は、およそ85か国。初来日は、1974年。その時は興行ベースだったが、ドキュメンタリー映画「ベンポスタ子ども共和国」が上映されたのちに、「草の根」の実行委員会が立ち上がり、1993年夏には、85人が全国9カ所で公演し、大きな感動を与えた。映画やサーカス公演をきっかけとして、ベンポスタに行く日本人の子どもたちも増えた。

現在は、子どもを主体とする「子ども共和国」の姿はないが、ベンポスタの思想や歴史をとらえなおし、アーカイブ化したり、ミュージアムを作る作業も進んでいる。また、ベンポスタを映像で記録する試みもなされている。